

「殿。大膳亮にござります」

正木通綱の声が響いた。

「はいれ」

義豊は低く、応えた。

「大膳亮に、どうしても問いたかったことがあつてのう」

義豊はまばたきもせずに通綱をみた。いつになく落ち着き払ったその態度に、通綱は殺意にも似た気配を、直感的に悟った。

「いかがした。もつと近う」

「いえ。これにてお答え申し上げます」

通綱は襖に近いところに膝をついた。

「正木の者たちは、在地豪族として領民を潤している。さればこそ、二統のためには、在地豪族の理解が欲しいのだ」

「そのこと、先代からも承っております。殿の夢は、現実には遠いものなり」

「二統のため、所領を里見家に差し出すがよい。さすれば、そつくり里見家から恩賞としてそれを与えることを約束する」

「……なにを？」

義豊の申し様は一方的だ。

所領を与えるから年貢をそつくり納めよ。されば六割を俸禄として与えるという。

これは、在地豪族の尊厳を奪うものだった。そもそも在地豪族の所領は、里見家から与えられたものではない。正木だけの問題ではなかった。この理屈は、どうあつても受け容れる訳にはいかない。

「どうしてもか？」

「……」

「そうか」

途端、襖が倒れ込んだ。

突然の出来事に、あつと見上げた正木通綱は、倒れてきた襖に押し潰された。そのうえから、無数の鎧が突き立てられた。

あつという間の出来事である。

「大膳さま！」

供していた上野筑後守は悲鳴に近い声を挙げたが、その首も、瞬時に飛んでいた。

義豊は顔色ひとつ変えることなく、じつと眺めながら

「こんなものか」

やはり、ぼつりと呟いた。

宮本城から里見実堯が駆けつけたのは、半刻も経たぬ頃であった。

正木通綱の骸を前に

「これは何事？」

と、実堯は詰め寄った。

「謀叛にござる」

「謀叛だと？」

義豊は顔色を変えることなく、淡々と言葉が続けた。

「大膳亮は水軍を我が物とし、稲村を攻めようとしていたのです」

「馬鹿なことを申されるな」

「叔父上も一味ではござらぬか？」

「殿？」

じつと、実堯は義豊をみた。

成る程、ここへ呼んだのは、畏ということか。

義豊もいつになく落ち着き払っている。腹を括った者は、躊躇いがないのだろう。

「海賊衆を手懐けて、よもや儂を攻め殺そうと考えたのではございせんか？」

「お前、阿呆か！」

呆れたように、実堯は吐き捨てた。

「よろしいか？里見が生き残るためには、二統などという夢を語ることなく、安房のすべてが結束しなければならぬ。内憂外患を退けてはじめて、殿の望む二統の道が開けるのじや」

わかるかと、実堯は詰った。

「大膳は里見に尽くしてきた。それを、殿こそ私利私欲で殺したのですぞ！」

実堯は激しく吼えた。

このように激昂する実堯は、初めてではあるまいか。しかし義豊とて、もはや後には引けない。その理と相容れぬ己の我を貫くまでだ。

実堯の激昂を跳ね返すように

「だまれ」

強い口調で叫んだ。

「いまの儂は、そなたら奉行衆の傀儡ぞ！」

何を云いだすのかと、実堯は目を丸くした。

「もう、傀儡は御免だ」

「情けないことを申される」

「傀儡にされるのは、真つ平だ」

餓鬼の駄々に等しい。

「傀儡なんぞ、もはや我慢ならず。覚えたか叔

父上！やがては権七郎もそちらへ送つてやるほ

どに、安心して成仏せい」

「なに？」

「さらば、叔父上！」

義豊の指図に、御傍衆は一斉に刃を突き立てた。

彼らは純粹に実堯を憎んでいた。

躊躇いもなく、その白刃は実堯の身を激しく

切り刻んでいった。

何の感情もなかった。

ただ目の前には、あれほど目障りと思っていた叔父の骸が、何も語ることなく伏していた。

「あとは、長狭と久留里の吉報を待つだけにござります」

本間八右衛門の言葉に、義豊は何度も頷いた。
やがて

「片付けておくように」

そう言い残して、座を立ち上がった。

稲村城から滝田城へは、安房府中を経由して

平久里川を上った先になる。城主・一色九郎と

は、美の婚礼以来会っていない。

義豊が単身、ふらりと滝田城へ現れたのは、

実堯を殺害した直後のことである。

「殿、これはなんとしたこと」

突然の来訪に、一色九郎は慌てて出迎えた。

「九郎殿は里見の大切な婿である。これからの

ことを話し合いたい」

「これは是非もなし」

「宮本へ留め置き、常より監視を頼んでいた叔

父の処遇だが」

「はい」

「先ほど、始末した」

「は？」

「もはや、里見の統率者は儂のみである。ゆえに義弟として、九郎殿を信の置ける無二の者として頼むものである」

一色九郎は困惑した。

聡明な彼には、実堯の存在が里見にとってどんなに重いか、よく理解できていた。

里見家の大黒柱を殺害したら、果たしてどうなることか。その答えがすぐには浮かばなかった。

十十十

犬掛へ(2)

夢酔 藤山